

ものづくりの現場から

町工場

わり始めている。海外との競争、円高など逆風は続く。それでも未来を信じ、歩みを進めるものづくりの現場を見る。(新山創)

国産ジーンズ発祥の地、倉敷市児島地区。ミシンの音が響く工場に、4人の若い女性の姿があった。縫っているのは小銭入れやティッシュカバー。手元をじつと見つめ、デニムに針を落とす。

倉敷のベティスミス

縫製部門35年ぶり

校側から「希望者がいる」と連絡が入った。新入社員は工場に活気を運んだ。縫田洋己工場長(48)は「最初は半信半疑だったが、会ってやる気を感じた。彼女たちにベテランの技術をつなげていかねば」と指導に熱を入れる。



作業効率アップへ連携

ビジネス支援NPO

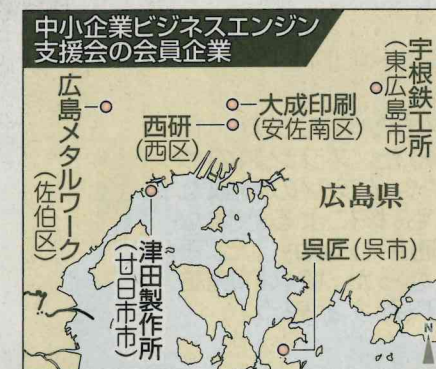


時に厳しく指摘し合って連携を深める中小企業ビジネスエンジン支援会のメンバー(広島市佐伯区の工場) (撮影・高橋洋史)

大企業に技術アピールも

「うちの工場に悪いところがあればどんどん言ってほしい」。広島市佐伯区湯来町にある板金加工の広島メタルワークの工場で、前田啓太郎社長(46)が呼び掛けた。集まったほかの会社の30人が点検シートを手にも目を光らせる。1人が鉄材の置き方を見て言った。「これ危ないな」

工場をきれいにすることで作業の効率を高める狙いだ。設立当初から参加する金属研磨の西研(西区)は、会員からの厳しい指摘をもとに、使わない工具や書類を11ト減らした。寺本博社長(54)は「甘えは許されない。変わった工場を見て驚く得意先もいる」と実感する。



成長した。自分から問題点を見つけるようになった」と喜ぶ。自動車部品など試作の津田製作所(廿日市市)は、20年前から1社で取り組んできたが根付かなかった。「一緒にやるから競う心が生まれて続けられる」

と津田義明社長(46)。工場には技術のノウハウが詰まっているが「けちくさいことは言わず、みんなに見せる」と言い切る。発起人でもある同社は、2008年のリーマン・ショックで仕事が一時的減った。津田社長は「中小零細は技術があっても大きな企業から見落とされやすい。協力してアピールするグループが必要」と考える。

事業所数45%減 従業員数31%減

バブル崩壊20年 グローバル化が打撃

